

実践報告

地域に対する愛着の高まりを目指した生活科の授業づくり —地域の「すごか人」にこだわり続ける児童の姿を追って—

森田 祐介*

A Study of Living Environment Studies
Aimed at Increasing Attachment to the Community
: Following the Appearance of Children who Continue to
Stick to the "Great People" of the Area

Yusuke MORITA*

【要約】

児童は、学校や家庭を中心とした生活から、身近な環境や人々との関わりを通して、次第に地域へと生活の場を広げていく。学習指導要領には、「それら（地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々）に親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする」とある。つまり、地域が児童にとってより大切なものになることを目指しているのである。本実践では、「まち探検」の学習を通して、地域の「もの・こと」から「ひと」へと視点を変えながら、地域への愛着を高めていく児童の姿を目指したものである。

【キーワード】

地域への愛着 すごか人 教師による価値付け 表現活動を通した学びの自覚

1 はじめに

多くの小学校では、第2学年の生活科において「(3)地域と生活」を中心に構成された「まち探検」の実践が行われる。学習指導要領で謳われている地域に対する「親しみや愛着」をもたせることは、容易なことではないと多々感じるがあった。それは、社会認識的な学びを意識するがゆえに、児童に社会科的な学びを強いてきたことに原因があるのではないかと考えるようになってきた。児童が学習対象との距離を縮め、自分事として学ぶことができなければ、よりよき生活者を育てることはできない。今一度、生活科という教科の特質である「自立し生活を豊かにしていく」ことを意識した実践を行いたい。本実践の視点として、地域への愛着という情意的な側面をいかに児童が形成していくのかを追っていくようにする。

2 本実践について

(1) 単元構成について

本実践は、内容「(3)地域と生活」「(8)生活や出来事の伝え合い」を中心に構成している。児童の生活の場は自分の家やその周辺から通学路、学校へと少しずつ広がっていく。そして、日頃から友達と遊んだり、家族と買い物をしたり、地域の行事に参加したりして、様々な人々や場所と関わって生活するようになる。しかし、本校の特性上、学校の周りがあるまま自分の生活の場と重なる児童はそう多くはない。日頃の登下校や学習活動等以外に、地域（学校の周り）と自分との関わりを捉える機会が少ないのである。だからこそ、「まち探検」を通して、地域の人々や場所のよさに気付き、それらを大切にしたい気持ちや地域に積極的に関わろうとする気持ちを育んでいくことに価値がある。また、

*佐賀大学教育学部附属小学校

繰り返し「まち探検」を行うことで地域の人々の思いや願いに迫ろうと探究する姿も期待できる。地域のよさを発見した喜びや気づきを誰かに伝えたいという気持ちを原動力とし、児童の主体性を引き出していきたい。本校の周りには、整備された公園や図書館、佐賀城本丸歴史館などの公共施設、地域の人々に愛されている商店など魅力的な施設が多く存在する。児童は、「まち探検」を行うことで様々な「ひと・もの・こと」に出会い、その存在に気付いていくであろう。単に場所の存在やそこにあるもの、その働きなどの気づきに終わることがないように、「ひと」の思いや願いに着目させていきたい。そのためにも、繰り返し働く人々に直接働きかけることで対象との距離を縮め、自分との関わりの中で対象を捉えさせていく。

(2) 指導方略について

指導にあたっては、まず、クラス全体で学校の周りを「秋さんぽ」することから始める。地域の人々の営みが見える商店や児童にとって親しみある公園、城内エリアならではの歴史情緒あふれる史跡など、気付いてほしい場所を中心に散策する。その際、その場所に目が向くように児童に問いかけたり、自分たちの生活を想起するような話題を振ったりしながら、自分との関わりを感じさせるような散策としたい。次に、「秋さんぽ」の振り返りを基に児童が行きたい場所を決め、1回目のまち探検を行う。そして、1回目のまち探検で気付いたことの中から「ひと」に関することに教師が価値付けを行い、地域で頑張っている人、輝いている人を「すごか人」と銘打ち、2回目のまち探検の目的を「すごか人のすごかところ」を見つけるという活動の方向性をもたせる。3回目のまち探検では、そこで働く人々の思いや願いに触れることができるようにインタビュー活動を行ったり、お試し体験をさせてもらったりしながら、「優しさ」「仕事の楽しさや難しさ」等に触れ、実感を伴った気づきを得ることができるようになりたい。その気づきが地域の人々の思いや願いに気づき、地域への愛着を生み出すことにつながるであろう。

その後、3回のまち探検を通して見付けた「すごか人」をクラスで紹介する活動を仕組む。本単元のゴールを「他のクラスの人たちやお家の人に『わが町のすごか人』を紹介する」と設定するため、プレ発表の形態を取り入れた。相手意識をもった表現活動は、自分たちが気付いた地域の人々のよさを再考し、新たな表現方法やより強い思いや願いにつながるからである。自分たちが見付けた「すごか人」を紹介するために、劇化したり、紙芝居やペープサートにしたりと様々な表現方法に挑戦させる。よりすごさが伝わることを目指して、内容や表現方法を試行錯誤する姿を期待したい。また、「すごかポイント（地域の人々を見る視点）」を基に聞いたり、質問したりする活動を仕組むことで、表現できていなかった地域の人々のよさや自分たちの頑張りにも気付かせる機会とする。単元の終末では、お世話になった地域の人々へ感謝状を書くという活動につなげることで、単元を通して膨らんだ地域への親しみや愛着を表出させていく。

(3) 本実践で目指す児童の姿

まち探検を通して、地域やそこで生活したり働いたりしている人々について考え、その思いや願いに気づき、地域の場所や人々に親しみや愛着をもちながら生活しようとする。

(4) 本実践の評価基準と単元計画

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①地域で生活したり働いたりしている人々の工夫や努力、思いや願いに気付いている。	①まち探検を通して、地域の人々のことを考え、それらと自分の生活との関わりを捉えている。	①地域や人々と関わることに関心をもち、親しみをもって話したり、活動したりしようとしている。
②地域と自分の生活との関わりについて気付いている。	②まちの「すごか人」について分かりやすく表現している。	②地域の場所や人々のよさを大切にして生活しようとしている。

過程	時配	主な学習活動 (○)	教師の主な働きかけ (□)
であう・みとおす	1 2 3	○ みんなで「秋さんぽ」にでかける。 ○ 「秋さんぽ」で見付けた「ひと・もの・こと」をクラスで共有し、行ってみたい場所や気になる場所を想起する。	□ 気付かせたい場所や出合わせたい人がいるところを意識的に散策し、児童の生活や経験と結び付けられるように問いかけを行った。 □ 気付かせたい場所の写真を事前に準備し、フォトラリーのようにゲーム感覚で取り組めるようにすることで、探検隊になりきって取り組むことができるようにした。 □ クラス全体で振り返った際の気付きや疑問を写真に書き込んで、簡単な城内・水ヶ江マップをつくることで、計画を立てる際の資料とした。
おこなう	4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16	○ まち探検の計画を立てる。 ○ グループでまち探検を行う。 ○ 見付けたことを「ひと・もの・こと」にカードに記入し、クラスで共有する。 ○ 「すごか人」探検を行う。 ○ 見付けた「すごか人」についてカードに記入し、クラスで共有する。 ○ 「すごか人のことをみんなに伝えよう」という活動の見通しをもつ。 ○ 「すごか人」を紹介するための準備をする。 ○ 「すごか人」のお試し紹介を行う。 ○ 「すごか人」紹介を動画に取り、クラスで見合う。	□ 自分が気になった場所を中心に探検する場所を決めさせる。その際、「とても○○なもの(すごいもの、不思議なもの、頑張っている人等)」を見付けるという視点をもたせた。 □ 「ひと」との出会いを仕組むために、出会ったり、話をしたりした人には名前を聞くように促した。 □ 「ひと」に着目できている児童への価値付けを行い、地域で「頑張っている人」「優しい人」「こだわりがある人」(以下、「すごか人」)が地域にはたくさんいるのではないかと見通しをもたせた。 □ 地域で頑張っている「すごか人」の「すごかところ」を見付にいくという目的意識をもたせることで、地域の人々の思いや願いに気付くことができるようにした。 □ 地域の人々の思いや願いにつながる質問や見学計画を立てているグループを取り上げ、「すごか人」から気持や思いを聞き出そうとする意識付けを行った。 □ 「すごか人」探検で地域の人々の思いや願い、工夫や努力に迫ることができていることに価値付けを行い、称賛していった。 □ これまでのまち探検を通して、感じたことや気付いたことを基に「すごか人のことを伝えよう」という新たな活動を設定した。 □ 「すごか人」の何を伝えたいのか明確にさせ、どのように紹介すればより伝わるのか試行錯誤させた。 □ 「すごか人」の紹介を「すごかポイント(地域の人々を見る視点)」を聞いたり、質問したりする場を設けることで、表現できていなかった地域の人々のよさや自分たちの頑張りにも気付くことができるようにした。 □ 地域の人々のよさを伝えるために頑張ってきた自分の成長に気付かせ、称賛した。
ひらく	課外	○ まち探検でお世話になった人々にお礼の手紙を書き、届けに行く。	□ 「すごか人」を紹介することを通して、人々の思いや願いに迫れたことや自分と地域との関りについて考えさせることで、地域の中でよりよく生活していきたいという気持ちをもたせるとともに、地域への愛着を膨らませた。

3 実践の実際

(1) まち探検の振り返りを通して、地域への「ひと」に着目できた児童たち【7時目】

グループでの1回目のまち探検では、「とっても素敵」「とっても不思議」「頑張っている人」等の視点で探検を行っている。児童の実態としては、そこにある「もの」には気付くことができているが、なかなか「ひと」に気付き、地域の人々の思いや願いにまで迫ることがなかなかできないのが実情である。そこで、まち探検を行う際には、「出会った人の名前を聞いて、仲良くなってくる」ことを共通のミッションとして投げかけている。事前に児童が行きたいと計画している場所については、活動の意図を伝えること、できるだけお店や施設を訪ねて、協力依頼をすることで学校との関係性を築くことも心掛けてきた。

まち探検で見付けたものをクラスで共有する前に、児童はカードに見付けた「もの・こと・ひと」について整理をしている。そのカードで「ひと」に着目できている児童を皆の前で紹介し、価値付け

を行った。特に、「からあげ屋」「写真館」「肉店」「八百屋」等の店主の方に着目できていた児童は、「からあげ屋さんはとても優しかったよ」「八百屋のおばちゃんは50年も続けているそうだよ」「お肉屋さんにはたくさん賞状があったよ」「カメラ屋さんには1万枚以上写真を撮ってきたらしいよ」等の気付きを得ることができていた。児童と共有をしていく中で、「お肉やさん、すごい!」「からあげ屋さん達人じゃん!」等の発言が聞かれるようになってきた。



図1 地域の人々へインタビューを行う児童

そこで、「どうして、すごいと思うの?」と聞き返したところ、「だって、賞状をもらえるなんてプロだよ」

「こんなに親切に教えてくれるから」「50年間3人でお店を支えているから」「頑張っているから」等の発言を引き出すことができた。「学校の周りには、『すごか人』がたくさんいるんだね。よく見付けることができたね」と称賛することで、「また、『すごか人』に会いに行きたい」という意欲付けを行うことができた。また、児童が自分たちの生活との関わりで、地域の人々を捉えている姿にも価値づけを行っていくことも大切にしていた。「給食用のお肉も届けてくれるんだって」「この間、からあげ弁当を買って食べたよ」等、直接的間接的な関わりを大切に取り上げることで、児童はより地域の人々を自分事として捉え、自ら働きかけようとするようになっていった。

(2)「すごか人たんけん」の見通しをもちながら活動する児童たち【8, 9, 10時目】

「すごか人」の「すごかところ」を見付けに行くというまち探検の視点ができたところでグループでの2回目のまち探検の計画を立てた。計画を立てる上で、もう一度クラスで「すごかところ」とは何なのか共有した(図2参照)。以下に示しているものが「すごさ」と捉えている視点である。

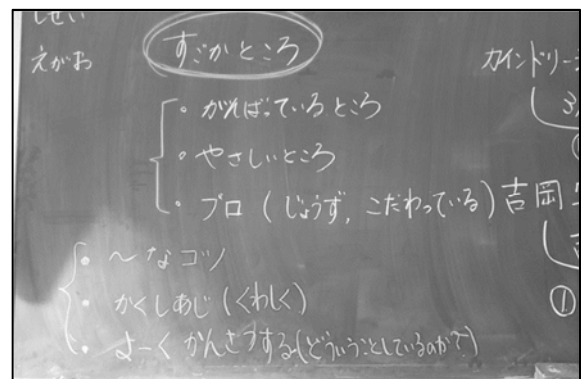


図2 まち探検の視点を示した板書

その視点を基として、聞きたいこと、調べたいことをグループで話し合わせた。「こだわり」「大変なこと」「うれしいこと」等の思いや願いに迫ることができそうな質問を考えているグループを取り上げて、クラスで共有する時間をつくった。そのような視点で質問を考えられる児童はそう多くはない。しかし、教師が質問内容にも価値付けを行い、クラスで共有することによって視点を得ることができるという学びが生まれたのである。そのような学びの積み重ねが児童の意欲をさらに高めさせ、「すごか人探検」に向かわせていくのである。

その後のまち探検では、積極的に地域の人々に関わっていく児童の姿が見られた。Tシャツを作成しているお店に行った児童は、「できれば中を見せていただけませんか?」とお店の方をお願いをしたのである。児童にとって、その店は2回目の訪問であった。お店の方も予期していなかったような様子であったが、快く作業場を見せていただいた。そして、外から見ているとパソコン作業が多そうなイメージがあったが、予想以上に手作業が多いことに児童も感銘を受けているようであった。気になる機械のことを次々に質問し、お店の方も感心されていた。教師も補佐的に作業されている姿や説明されている姿に「すごいね」「たいへんだね」と価値付けや意味付けを行うことで児童の記憶に残っていくようにした。最後に「こだわりは何ですか?」と児童が問うたところ、「こだわりがないところがこだ

わり。お客さんに合わせる事が大切だと思っている。」という言葉で児童の目がお店の方に更に釘付けになった。まさに、思いや願いに迫った瞬間である。お店の方から聞いたことについて、「かっこいいね」「すごいことを聞いたね」と更に価値付けを行うことで、実感を伴った学びを得ることができた。

(3) 「すごか人たんけん」の振り返りから新たな活動への思いをもつ児童【11. 12時目】

「すごか人たんけん」の振り返りでは、クラス全体で共有することはせず、自由に動きながら友達と共有するような形をとった(図3)。ただし、同じお店の人と関わった児童同士が交流できるように場を設定した。児童らは、適宜新たな気付きが見見付かるとカードに記入し、カードを増やしていった。カードが増えていくこと自体に達成感を感じ、学びが蓄積していることを実感しているようであった。ここでは、あえて見付けたことをクラス全体で共有することをしていない。



図3 まち探検の振り返りを共有する児童

「自分だけが見付けた『すごかところ』『自分が見付けた『あの人のこだわり』』というような特別な思いに浸らせるためである。このことが、後の伝えたいという原動力になっていくのである。

クラスの中で「地域にはこんなにすごい人たちがいる」という充足感が漂う中、ある児童のつぶやきから次への活動の方向性が決まっていた。「こんなにすごいのに何でお客さんはそんなにいないんだろう？」このつぶやきに続いて「もったいない!」「みんな知らないんじゃない?」「宣伝したい」という発言が続いていった。中にはチラシみたいなものを既に作り出す児童さえいた。「2の1の恩返しだ!」と次の活動への機運は急速に上がっていった。そこで、「伝えることが恩返しになるのかな」と児童に問うたところ、「みんなが買ってくれるようになるよ」「知らないのはもったいないよ」との返答。児童の意欲に押し出されるようにして、次の活動が決まったのである(図4)。まさに、児童の地域や「すごか人」への愛着が膨らみ、どうにかしたいという思いが溢れだした瞬間であった。児童の思考の文脈や思いや願いを大切にしながらも、「ひと」という視点を共有し、教師側が意図をもって計画を助言したり、獲得した気付きに対して価値付けを行ったりすることが重要であると考え、実践を重ねた。1つの気付きから学級集団に大きな学びのブームを生み出し、その繰り返しが新たな学びや活動をつくり出していくことは生活科の醍醐味である。さらに単元終末では、考え、表現するということを繰り返しながら、地域の人々のよさを再確認し、確かな気付きを得たり、関わった人々への思いを更に強くしたりする児童の姿を目指していった。

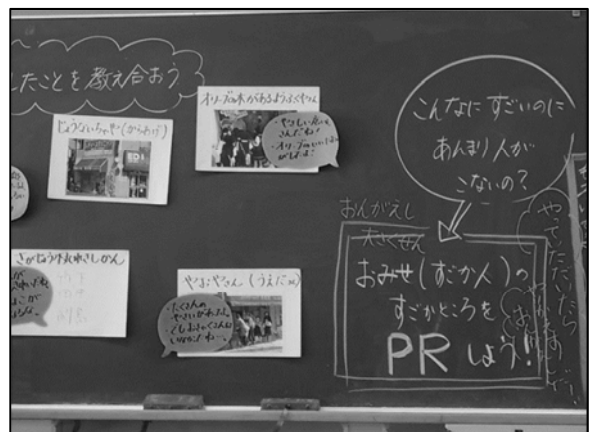


図4 新たな活動を見出した授業での板書

(4) 「お試ししようかい」活動による、伝えたい内容や表現方法の更新【13, 14時目】

見付けた地域の人々のよさをどのように伝えるのかを児童と検討した際、保護者へ紹介したいという意見が高まっていった。ただ、コロナ禍という社会情勢から学校に招待することはできない。だから、動画を配信して見てもらおうという方向性が決まった。

その後、児童たちは、伝えたいことを精査しながらどのように伝えるのか試行錯誤を繰り返していった。劇で伝えるグループ、役割を決めてよさを輪番で紹介していくグループ、様々であったが音声

だけでは伝わりにくいということがグループの中で交わされるようになっていった。

自分たちだけで活動をしていても客観的に振り返ることは低学年児童にとって難しい面がある。そこで、「お試ししようかい」活動を仕組むことで相手意識をもたせ、伝えたい内容を明確にさせたり、表現方法を再考させたりするための時間を設定した。劇を軸に「すごか人紹介」を考えていたグループには、他のグループから「何を紹介したいのか分からない」という指摘が入った。児童たちなりにどうしたらいいかと考え、途中で言葉を入れてストップモーションのように劇を作り直したいという工夫を導き出したのである。ここで大切にしなければならないことは、何を伝えたいのか明確にさせることである。劇や動きで伝わらなければ、言葉にすることの方がよいということを他のグループでも実践されていたのである。

14時目の授業では、「①自分たちの伝えたいことを相手に伝え合う」「②感じたことを話し合う」「③よりよい方法を再考する」「④再考したものを試す」という流れで学習を進めている。「④再考したものを試す」ことをクラスの前で披露できたグループは、他のグループからの称賛や教師からの価値付けの言葉により、成就感を味わい、実感を伴った学びをすることができていた。このように、自分たちは何ができるようになったのか、どのように変化したのか、そしてそれは価値があるものなのかを体感させることこそが深い学びを生み出すための必要条件ではないだろうか。表1に、児童が授業後に書いた振り返りの記述を示している。

児童の振り返りの記述からは、活動への意欲が高まり次時への期待が膨らんでいる様子が見られたり（**波線部a**）、触れ合ってきた地域の人々への愛着や誇りさえも抱いていることを見取ることができる（**波線部b c**）。このように、自分たちが学んできたことを発信したいという思いや願いにそった活動を仕組むことで、児童の気付きが明確なものになり、活動への意欲の高まり、また地域の人々への愛着が醸成されていくこと様子を見ることができた。

(5) 単元を通して高まった地域への愛着を表出させる児童【16時目】

16時目では、児童たちが自分たちなりの「すごか人しようかい」を成功させることができたという充実感を味わっている姿が印象的だった。児童から「もう一度会いに行きたい」「手紙を書いてほしい」という言葉が自然と発せられていた。そこで、16時目の後、課外の時間で感謝の手紙を書く時間を設けた。児童の手紙からは、自分たちが見つけた地域の人たちのよさ、関わった人たちへの愛着を見ることができた。手紙の中でも「またお店にいきたい」「ぼくも、〇〇さんのようにきついこともがんばっていきたい」等、自らの生活につなげていこうとする児童の姿を見ることができた（図5）。

表1 「お試ししようかい」後の児童の振り返り

〈児童A〉

グループでやり合ったとき、どっちもわからないと言ったのでなんでだろうと思いました。いっぱい話し合っ、すごくいいげきになったので、本番の時のやる気がめっちゃ上がって早くしたいなと思いました。a

〈児童B〉

もう1回せんでんしたをしたら、うまくいきました。やっぱり声を大きくしたほうがわかりやすいんだなと思いました。わたしたちのせんでんでカインドリーショップやさんが人気になるといいなと思いました。b

〈児童C〉

げきはかんせいしたけど、もっとパワーアップして、よしみちさんのすごかところを知ってほしいです。よしみちさんには、いっぱいすごかところがあります。それをぜんぶ伝えたいなと思いました。c

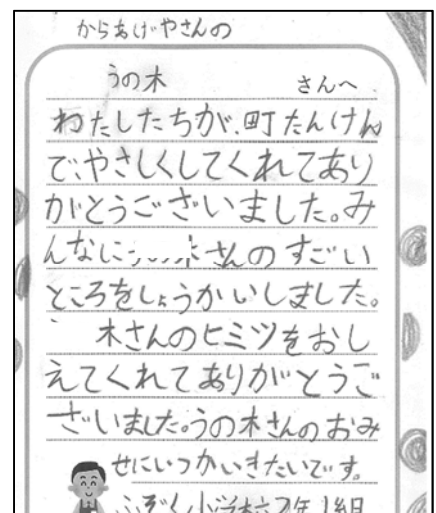


図5 児童が書いた手紙

4 まとめと考察

本実践では、地域への愛着を高める授業の在り方を児童の姿を追うことで明らかにしようとした。他の多くの実践の中で語られている、児童が繰り返し関わる機会を設けることで自分事として捉えいくということは明白なことである。それに加えて、児童に視点をもたせたり、次への活動へと誘うのは教師の働きかけと児童への価値付けに他ならない。児童の思いや願いに寄り添い、児童の思考の文脈で授業を展開していくことが主体性を更に引き出すことが分かった。そのような意欲の高まりが学習対象へ粘り強く働きかけようとする態度につながり、結果的に地域の人々に対する愛着を高めることとなったと言える。こういった学習の積み重ねが、よき生活者を育てることにつながるのではないだろうか。

《参考文献》

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』2018, 東洋館出版
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』2018, 東洋館出版
- 3) 加藤誠司「社会的な見方・考え方につながる生活科の実践的研究—空間・愛着・自己実現を手がかりに—」『愛知教育大学研究報告』2016, pp. 17-24
- 4) 奈須正裕 編著『教科の本質を見据えた コンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブック—資質・能力を育成する15の実践プラン—』2017, 明治図書出版
- 5) 日本人間教育学会編『教育フォーラム64 学びに向かう力 学習活動を支える情意的基盤を』2019, 金子書房